

# 戦時下の世間話——怪談より怖い「笑い話」がもつ意味——

今井秀和

## 一 戦時下の庶民の声

太平洋戦争当時の噂話について考えてみたい。戦争のさなか、日本のあちらこちらで語られていた噂話には、時勢を反映した特徴がどのように現れているのだろうか。また逆に、平時——いつたい、いつを平時と呼べばいいのかも難しい問題ではあるが——に語られていた噂話との共通点は、どれくらいあるのだろうか。

言い換えれば、戦時下における市井の人々の生活の実態を知ろうと、ある程度通時的な流れのなかにおける戦時下の噂話の意味を、改めて見つめ直してみたいのである。

筆者の専門は主として江戸期から近現代にかけての怪異・妖怪文化の研究であるため、とくに噂話（民俗学的な用語でいえば「世間話」）に表出する怪異や怪談の問題に力を割いて考察を進めることになる。しかし、それと同時に、戦局や世相に関する流言飛語（蜚語）、笑話や悲話など、怪談とは別の方向性をもった世間話も考察の俎上に載せて、戦時下における庶民の生活のなかで怪異や怪談が占めていた位置を明らかにしていく。

世間話のなかには、銃弾よけのまじない等、いわゆる俗信や民間信仰にまつわるものも表出するが、紙幅の都合上、俗信などについては本稿では深入りせず、別の機会に譲ることとしたい。

さて、戦時下において迷信・俗信や怪談は、表立って語るべき事柄ではないと考えられていた。建前上、こうした点においても、軍・官・民は足並みをそろえておく必要があつたのである。例として永井荷風の日記『断腸亭日乗』から、芝居の禁令を巡る以下のような噂を引いてみよう。

噂によれば化物の見世物怪談及び猫騒動の芝居等禁止せられし由。

（昭和十七年九月二十日）

新舞踊土橋の雨とやら題するもの累の殺し上場禁止となりしと云。歌舞伎座にて真景累ヶ淵も過日禁止となりしが其理由は人の殺されて後化けて出るは迷信にて、国策に反するものと言ふに在る由なり。

（昭和十八年六月二十五日）

最初にあげた日記の記事からは、昭和十七年（一九四二）に、化物の

見世物、怪談および猫騒動（化け猫もの）の芝居などが禁止されたという噂が出回っていたことが分かる。次に挙げた翌年の記事には、日本を代表する女の怨霊であるところの累ヶ淵かさねがふちの「累」ものの芝居が立て続けに禁止されたという噂が記録されている。累（お累おひ）は、四谷怪談の「お岩」、皿屋敷の「お菊」、牡丹灯籠の「お露」と並び、江戸期から近現代にかけて活躍を続けるメジャーな幽霊であった。

当時の演劇や映画は、個別の作品の内容が国威高揚の目的になつてゐるか否かに応じて、ときに奨励され、ときに禁止されていた。そして、非常時における数少ない遊興を楽しみにしていた庶民たちは、真偽はともあれ、上演禁止にまつわる噂をたびたび媒介していたのである。

しかしながら、遊興メディアで禁止されるような事柄であつたからといって、戦時下において迷信や怪談がなかつたわけではない。それは、表立つて語るべき事柄ではなかつたかもしれないが、密やかに巷間を渡り歩く不死身の存在であつた。怪異・妖怪は、たとえ公的な場を棲家にできずとも、庶民が語る噂話のなかを跳梁跋扈していたのである。

『真景累ヶ淵』の上演禁止に関する記事の後、荷風は「藝術上の論は姑く置いて、人心より迷信を一掃するは不可能の事なり」と述べているが、実際、まったくもつてそのとおりなのであつた。怪異・妖怪文化にまつわる世間話の記事は、戦時下における庶民の日記や、不埒な噂を取り締まるために編まれていた官憲資料のなかに散見されるのである。

## 二 戦争に関する噂話の研究

本稿では、戦後に書かれた記録や追想の類は参考として用いるにとど

め、基本的に私的な目的で書かれた作家らの日記、とくに先ほど引用した永井荷風の日記と、山田風太郎の日記を主たる分析の対象に据える。これら二つの日記を主な分析対象とした理由に関しては後述する。

また、戦時下の噂話に関する貴重な事例集であり、徹頭徹尾、公的な意図をもつて記録された官憲資料（「憲兵司令部資料」、「東京憲兵隊資料」、内務省警保局保安課「思想旬報」など）からも適宜事例を抽出し、分析の対象に加えることとする。これらの資料は、南博・佐藤健二編『近代庶民生活誌』第四卷（流言）に収録されている<sup>⑤</sup>。官憲資料をあわせて見ていくことで、個人の日記がもつそれぞれの記述の方向性も自ずと明らかになつてこよう。

戦後、色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』のように、自己の記憶と大戦前後の記録とを突き合わせながら叙述を進めていくスタイルの、個人史でありながら世相史としての意味をあわせもつ、実証性の高い書籍が世に出た<sup>⑥</sup>。色川は、たとえば現代史の会編「官憲資料にみる民心の動向」に載る、昭和天皇の動向を巡る敗戦直後の噂話を紹介しながら、歴史の大きな動きのなかでの、庶民の精神史を紡いでいった<sup>⑦</sup>。

あるいは、松谷みよ子『現代民話考』シリーズのように、市井の人々の記憶に基づく過去語りや噂話を、テーマ別にまとめて書籍化していくような試みもなされた。『現代民話考』には「軍隊徴兵検査・新兵のころ」（第二巻）、「銃後・思想弾圧・空襲・沖繩戦」（第六巻）が設けられており、そこには、軍隊内部や「銃後」（戦地の後方という意味で、日本国内を指す言葉として使われた）におけるさまざまな体験談や噂話が収められている<sup>⑧</sup>。

戦争関連の噂話に関する研究は多い。なかでも太平洋戦争については、たとえば社会心理学者の池内一や社会学者の伊藤清隆による戦時流言の

研究、重信幸彦や根岸英之ら口承文芸研究者による戦争にまつわる世間話の研究などが挙げられる。<sup>9)</sup>

まとまった研究としては、前出『近代庶民生活誌』第四卷（流言）編者の一人で、社会学者の佐藤健二による『流言蜚語——うわさ話を読みとく作法』がある。同書は多方面にわたる先行研究の成果と問題点を押さえたうえで、太平洋戦争下を中心とした日本の流言蜚語に関して、発掘された官憲資料、日記、新聞記事などを資料体とした考察を展開する。<sup>10)</sup> 佐藤は銃弾よけの俗信や、人面獣身の予言獣「クダン」にまつわる噂の発生と変容の過程について細かく分析しており、戦時下の怪異・妖怪文化を考えるうえでも貴重な研究である。

また、「特高月報」などの官憲資料に記録された流言、新聞への投書、日記などを資料体として太平洋戦争の通史を描き出した政治学者の川島高峰『流言・投書の太平洋戦争』のような研究もある。<sup>11)</sup>

民俗学においては、近代以降の戦争に出征する神に関する研究の蓄積があり、近年では、橋本章彦「戦時下世間話の神々——昭和の戦争と民衆——」が、官憲資料、昭和十二年（一九三七）時の雑誌「民間伝承」、松谷みよこ『現代民話考』などを資料体として、「神々の出征」などの、神仏に関する世間話を分析している。<sup>12)</sup> また、全国的に展開するメジャーな神仏だけでなく、オシラサマなどの屋内神や、神として祀られた天狗や狸なども、民俗的想像力のなかでは戦地へと飛翔する。これら広義の神々の出征に関する研究としては、岩田重則「天狗と戦争——戦時下の精神誌——」などがある。<sup>13)</sup>

歴史学者の黒羽清隆「十五年戦争史のフオークロア——日記を読む楽しみ——」や、民俗学者の野村純一「危険な話群——『断腸亭日乗』から」な

どは、日記を資料体とした研究を展開している。<sup>14)</sup> 分析の対象を、戦争当時のリアルタイムな資料体に絞り込んだ研究である。

これに対して、戦後に書かれたり編まれたりした「資料」的な価値をもつ書物、あるいは民俗学的な研究に含まれる聞き取り調査などの記述には、当然のことながら戦後になってから得られた視点が介在している。編著者たちはもとより、情報提供者においても、である。そうした意味で、日記などのリアルタイムな記録に内包された、先行き不透明な世相のなかで醸成された不安感との間には、ある種のクレバスが存在すると考えておく必要があるう。

本稿で扱っていくことになる個人の日記と官憲資料という二種の資料体は、記録の目的は大いに異なっていたが、「リアルタイムな噂話」を書き留めたという共通性をもっている。

こうした、太平洋戦争当時のリアルタイムな声を書き付けた資料に目を向けたとき——そこから、いったい何が視えてくるのか。筆者自身も結論を留保した状態で、まずは、資料から溢れ出してくる不安な声の洪水に身を任せてみたい。

### 三 様々な視点のリアルタイム資料、「日記」

周知のとおり、大政翼賛運動による言論統制が行われていた戦時下、新聞や雑誌などの一般的な刊行物には国家権力による検閲が入っていた。それはそれで、今となつては貴重な記録である。しかし、記者による記事のみならず読者からの投書にも、戦時下のマスメディアならではのバイアスが加わっており、多彩な世相の様子が活写されているとは言

い難い。当時の世相風俗の多面性を知らうえでは、作家その他の民間人が、官憲の目に触れる危険を怖れつつ書き残していた日記や私的な記録類が有益である。

もちろん、公刊された著名人の追想から私家版のマイナー個人史にいたるまで、戦後に書かれた記録類も重要な資料ではある。しかし、先述したとおり、そこにはどうしても、戦後に得た知見が反映してしまう。その点で日記は（公刊時の編集作業に伴う加工などの問題は付きまとうものの）、リアルタイムな記録としての価値がある。

今回、日記を資料体として扱うに際しては、まず、直接の資料として使えるかどうかは別として、さまざまな立場の人物によつて書かれたものに目を通すことを心がけた。たとえば、昭和天皇の側近だった木戸幸一の日記（戦後、東京裁判での資料としても用いられた）など、政治家によるもの<sup>15</sup>。また、日本民俗学の祖であり、大正年間に貴族院書記官長を務めていた柳田國男には、戦中の日記『炭焼日記』がある<sup>16</sup>。この日記には、憲兵隊から、無記名の投書に書かれた方言に関する問い合わせがきたことが複数回にわたり記されている<sup>17</sup>。

あるいは、ドナルド・キーン『日本の戦争 作家の日記を読む』で詳しく触れられているような、大佛次郎、永井荷風、伊藤整、高見順、内田百閒、中井英夫、山田風太郎、渡辺一夫、清沢冽、徳川夢声等々、さまざまな作家・学者・評論家その他の日記もある<sup>18</sup>。

久生十蘭など、従軍記者として各国の戦線をまわった作家の日記も公刊されている<sup>19</sup>。有名無名の職業軍人および募兵（職業軍人以外の兵）の日記類も、部分的なものも含めれば、少なからず公的機関に保存されたり、活字翻刻あるいは要約が出版されたりしている。たとえば、最

終階級陸軍中將の遠藤三郎（一八九三〜一九八四）は、一九〇四年から一九八四年の長期にわたって九十三冊もの膨大な日記を残した<sup>20</sup>。その中には、太平洋戦争当時の記事も含まれている。

作家など社会的に知名度のある人々以外も、もちろん日記を書いていた。青木正美『戦時下の庶民日記』は、著者が古書肆を商うなかで発掘した、商品価値は低い資料的価値は決して低くない市井の人々（作家を含む）の日記、手記、書簡などを紹介している<sup>21</sup>。

さらに、全国の一一般家庭の筐底に眠り、存在を忘れられてしまっている無名の軍人・一般人たちの日記・雑記の類も多いことだろう。私事になるが、昭和十八年（一九四三）、二十六歳の時にニューギニアで戦死した筆者の祖父も、死の前年に得た休暇の前後に、半月程のきわめて短い私的な日記を書き遺している。結果として、この日記が本稿に直接役立つことはなかったが、当時の日記類がもつ記述の振幅を確認する意味で、こうした断片的な資料にも目を通した。

#### 四 文豪・荷風の日記

さて、これら以外にもさまざまな職業・年齢の人々によつて書かれた日記の内容を確認していった結果、太平洋戦争の前後にあつて、一貫して本土で生活を送っていた永井荷風（本名：永井壯吉）と山田風太郎（本名：山田誠也）の日記を中心的な分析対象に据えることとした。

彼らの日記には、作家らしい、自己や周囲の人々の心理・人物描写だけでなく、市井の人々の言動が細かく描き込まれており、そこには、他の人物の日記よりも段違いに多くの「戦時下の噂話」が含まれていたか

らである。

荷風、風太郎の両者は職業作家として大成したという共通点もちなから、戦時下における年齢、社会的立場、思想の在り方においてじつに対照的である。ひとまず、この、きわめて対照的な作家および作家の卵の日記から、戦時下の噂話を拾い上げていくこととしよう。

『墨東綺譚』、『日和下駄』などの作品で知られる永井荷風（一八七九—一九五九）は、太平洋戦争開戦時の昭和十六年（一九四一）十二月八日には、同月三日の誕生日を迎えて六十二歳になったばかりだった。この頃、荷風はすでに文壇の重鎮だった。そして、しだいに生活しづらくなつていく戦時下の帝都において軍部を呪いながら、長年続けていた日記にさまざまな思いを吐露し、戦前に書いた小説の印税で暮らしていたのである。

荷風の日記は『断腸亭日乗』（「日乗」とは、日記を指す）と題され、広義の文学作品としても受容されている。太平洋戦争が始まる昭和十六年十二月よりも若干さかのぼり、以下、昭和十五年（一九四〇）から二十年（一九四五）にかけての記事をみていく。

荷風は昭和十五年二月十三日の日記に、電力不足に関する次のような噂を書き付けている。「日本橋三越に至り新着の洋書を見る。楼内減燈のため薄暗くなりて呉服物の色合など殆見分けがたし。（中略）町の噂に市内電力の不足は軍器工場にて電力濫用の結果なればやがて電車も運転せぬやうになるべしと云」

同年八月初一（八月一日）の日記には、「此日街頭にはぜいたくは敵だと書きし立札を出し、愛国婦人連辻々に立ちて通行人に触書をわたす噂ありたれば、其有様を見んと用事を兼ねて家を出でしなり。尾張町四辻また三越店内にては何事もなし。丸の内三菱銀行に立寄りてかへる。今

日の東京に果して奢侈贅沢と称するに足るべきものありや。笑ふべきなり」と、しだいに豪奢から遠ざかる都会生活に対し、冷笑的な感想を書き付けている。荷風が読み込んでいた江戸期の随筆などでは、記録者が、馬鹿げた事象と判断した記事の末尾に「笑ふべし」や「呵呵」（呵呵大笑の意）等と付記することがたびたびある。荷風もそれに倣ったのであろう。

こうした、時局を反映した実際的な噂だけでなく、ときには怪談めいた噂もあった。昭和十五年一月十四日および昭和十五年六月初一の日記には、火災や歌舞伎役者の死を、猫のたたりだとする噂が載せられている。さらに十一月二十六日には、人形のたたりをめぐる怪談の噂が記録される。

また、昭和十六年六月十八日には、「町の噂」として、日中戦争に赴いた兵士の悪行をめぐる怪談が載る。当時は残酷な奇談として受容されていたとおぼしいが、後述するような理由から、これを古典的な怪談の系譜に位置するものとして捉えることも可能である。そのあらすじを示せば以下のようなものである。

日本人兵士数人が、中国のとある医師の家に乱入し、娘二人を含む一家全員を井戸に投げ込んで殺した。やがて帰国した兵士のひとりが、自分の留守中に自宅に強盗が入り、妻と母とが暴力を受けたことを知り、発狂して市川の陸軍精神病院に送られた、というものである。

この「町の噂」がもつのは、戦地での残虐行為に関する噂話という意味に留まらない。すでに野村純一が指摘しているように、非道を働いた日本人兵士の嫁と母と同様の目にあわされていたという仏教説話式の因果応報譚じみた形式をとっている点で、きわめて説話的な構造を有し

ているのである。

さらに突っ込んでいえば、日本人兵士が、殺した中国人の医師一家を「井戸」に投げ込んだというくだりも、現実的な死体処理の方法を示しているだけでなく、この世間話が前近代から続く皿屋敷をはじめとした井戸の怪談の系譜に位置することを示していると考えておくべきであろう。すなわち、兵士の発狂の背景には、井戸に落とされた女の怨霊の発現という古典的、前近代的な文脈が控えているのである。

この噂話には、日中戦争当時、そして太平洋戦争開戦前夜における「戦場生活と復員後の生活の倫理観の落差」という同時代的な社会状況を踏まえて読み解くべき〈奇談〉の要素と、通時的な視点で読み解くべき〈怪談〉の要素が混在している。

そうした点でも興味深い世間話ではあるのだが、これ以上深入りすると本稿の目的からはいささか脱線してしまう。荷風による当該記事を包括した、日本における井戸怪談の系譜に関する考察については他日を期したい。さて、再び、時局を反映した噂話に戻ろう。

晴。午後二時強震。架上の物器危く転落せむとす。本年は必天変地妖の災禍あるべしとの流言盛なる折から人心頗恟々たり。

(昭和十八年七月初二)

記録者が、なぜ噂話を記録するのかという問題を考えるうえで、見逃せない記事である。荷風はここで、「流言盛なる折から人心頗恟々たり」として、流言を客観的に捉えようとしている。しかしながら、強い地震に遭遇したことで、荷風自身が「本年は必天変地妖の災禍あるべし」と

いう流言を想起してしまっているのである。荷風の言う「人心」に、荷風自身が入っているのは疑いない。

端的にいえば、記録者自身も、噂に関して百パーセントの否定をしないのである。だからこそ、日記に流言を記録して情報の相対化を図り、さらには、そこに否定的なコメントを付すことで、流言のもつ特殊な魅力から距離を置くようとしている。

能動的に、自己と、それを見つめる自己とを乖離させようとする行為が記述である、という事実を再確認させられる記事である。このことは、予言や占いに関する流言の記録に関してもいえる。

目黒祐天寺辺に住せる売卜者、この頃大に人気あり、戦争は六月中旬日本が勝ちにて突然終局に至ると言へる由、新宿笹塚辺にもお地藏様のお告なりとて戦争終局同じく六月中なりとの流言盛なる由

(昭和二十年五月初八)

予言や占い、また吉兆・凶兆などに関する噂は、戦時中、頻繁に出口しており、それを商売に結びつけている者も数多くいたのである。そして、こうした流言の記録者は、流言のなかに合理性を揺るがすマジカルな魅力を感じつつも、そこから距離を置く必要を痛感していた。だからこそ、日記における世間話の記録というリアルタイムな営為が必要になったのである。

不安と不満を抱えているのは、日記を残さぬ無名の庶民たちも一緒だった。古くから庶民が匿名で行う表現行為に、落書というものがある。太平洋戦争開戦前夜である昭和十五年から十六年にかけても、不穏な

ユーモアに満ちた落書が登場していた。ただしこれは、不特定多数の目に触れることを怖れて、偏奇館（荷風の住居）のポストに投函された「投書」でもあった。

郵便にて左の如き戯文を送り来れる人あり。半掃菴也有翁が鳥獣魚虫の掟ならひて黄表紙一卷ひねり出し申候に付霜の夜の御座興まで御笑覧に供し申候。（中略）魚鳥 新たいせい記 安和烏澁子作  
 世上困窮拳国一致の自肅振りに人間ばかりでは行かぬとあつて今般鳥獸并に虫けらいろくづ共一統へ簡略申付けらる鵲橋御門外近衛ヶ原に立てたる制札の下に鳥獣どもおびたゞしく群じゆなし唯がや  
 くくわやく言ふばかりにて何の事やらさつぱりわからず

（昭和十五年十二月初七）

文中の「半掃菴也有翁」は、「化物の正体見たり枯れをばな」の句で知られる元禄生まれの俳人、横井也有のことである。也有『鶉衣』拾遺下に収録される俳文「鳥獣魚虫の掟」冒頭は、「世上困窮につき、今般、鳥獣並虫のともがらへ、一統の簡略申付候」から始まり、その後は触書を模したスタイルで、「松虫・鈴虫のともがら、籠のうちにて砂糖水を好み、奢りのきたに候。向後は野山の通り、露ばかりにて精出しなき申すべき事」などといった俳文が続いていく。

荷風のもとに戯文を送った「安和烏澁子」を名乗る人物は、也有の「鳥獣魚虫の掟」に倣って、さらに生き物たちのキャラクター性を前面に押し出した黄表紙ふうの小品をひねり出したのである。ちなみに文中の「いろくづ」とは魚のことを指す古語である。

「安和烏澁子」は無論、お菓子の「あわおこし」をもじったペンネームであろうが、そこには「烏澁」すなわち、馬鹿げたことを意味する古語が含まれている。想像するに「安和烏澁子」氏は、安房ないし阿波の馬鹿者を自称する人物ではなかったか。粟おこしは大阪名物であり、同地の陸軍第四師団の非常食でもあったが、そこまでの詮索に意味があるかどうかは分からない。

「魚鳥 新たいせい記」（『太平記』と「新体制」の洒落）はこの後、街に掲示された高札（触書）の下で、蝶や魚や鳥たちが、世相を風刺した会話を繰り広げていく。その様子はまさに、人々が街頭で国家による様々な禁令をめぐる噂話を交わしている姿の戯画化にほかならない。也有の俳文だけでなく、中世から江戸期にかけて流行した、擬人化された動物や道具類などの異類たちが活躍する、いわゆる「異類物」をもじっているのである。黄表紙を意識し、戦時下の戯作を自認した落書の一種であるといえる。

江戸後期に出版された黄表紙等の草双紙類は、絵を主体とした短い読み物であり、「戯作」とも呼ばれていた。そして、表向きは子供向けの体裁をとった面白おかしく巫山戯た内容を示しながらも、ときに、大人の読者を意識した苦いエスプリを詰め込んであった。

政治や世相を風刺した同様の戯文は、翌年にも偏奇館のポストに届くことになる。それは、「慾篡怪といふ化物」に関するものであった。

此日左の如き戯文を郵送し来れるものあり。其一節をしるす。慾篡怪といふ化物 この化物は時平公のやうな公卿の衣裳に大太刀をつるし魯西亜風の櫛に乗りて自由自在に空中を飛廻るなり。但し西洋

人の目には見えず日本人の目にも見える化物なり。此化物ハ日本紀元二千六百年頃突然白井峠の辺より現れ出で忽の中に日本中の米綿甘蔗、バタ牛肉等を食尽し追々人民百姓の血を吸ふに至れり。其惨害大江山酒顛童子の比に非ずと雖三分退治せらるゝ見込なしと云ふ。その吠る声コーアコーアと聞ゆることもありセイセンと響くこともあり一定せず。その中に亦何とか変るべしと云ふ。

(昭和十六年五月三十一日)

説明するまでもなく、「慾篡怪」は「翼賛会」、すなわち大政翼賛会を指す。「慾」の字は「欲」を示し、「篡」の字は「うばう」と読む。この化物の鳴き声「コーア」は「興亜」、「セイセン」は「聖戦」であり、當時さかんに国家が唱えていたテーゼをもじっている。

前近代から続く、政治や世相を風刺した落書、とくに江戸期における、老中田沼意次などの権力者を戯画化した化物絵を下敷きとしたものだろう。偏奇館のポスト宛にそつと届けられたという点が、落書作者の、官憲の捜査力への怖れを示している。

ところが、太平洋戦争開戦直後には、実際に「公衆」の面前である共同便所の壁を使った落書が登場するにいたつた。この、官憲の捜査を怖れぬ落書も、荷風の日記に記録されているので以下に引いてみよう。「開戦布告と共に街上電車其他到处に掲示せられし広告文を見るに、屠れ英米我等の敵だ進め一億火の玉だとあり。或人戯にこれをもじりむかし英米我等の師困る億兆火の車とかきて路傍の共同便処内に貼りしと云ふ」

(昭和十六年十二月十二日)

戦時下であるかどうかにかかわらず、荷風の日記には頻繁に、江戸の

文人の著作を読んだ際の覚書や、文人の墓や碑などを訪ねた記事が登場する。したがって、荷風の江戸趣味がこれらの落書を記録せしめたともいえるが、落書の出所が荷風以外にある以上、戦時下において発生した、世相風刺のための文化現象のひとつとして捉えておくべきであろう。こうした創作物も、世間話の周縁に位置していたのである。

また、江戸期には、匿名の落書や狂歌ではない、作者の分かっている戯作のなかに潜まされた体制批判に対して出版取締令が出され、処罰の対象ともなっていた。たとえば戯作者の山東京伝などは筆禍事件で手鎖の刑に処せられている。荷風のもとに戯文を届けた昭和の匿名戯作者は、江戸の諧謔に含まれる反骨精神を想起しつつ、うつぶんのはけ口と連帯感を求めていたのだろう。戦時下の妖怪文化のなかには、諧謔に満ちた江戸文化の再来としての異類や化物も含まれていたのである。

荷風の近辺に長居をしていたせいも、少しばかり話が好古に傾き過ぎたようである。続いて、戦後に「山田風太郎」として世に出ることになった青年の日記をひもとくこととしよう。

## 五 文学青年・風太郎の日記

戦後に『魔界転生』、『甲賀忍法帖』などの忍法帖シリーズや『警視庁草紙』などの明治もので名をはせることになる大衆作家、山田風太郎(一九二二〜二〇〇二)は、太平洋戦争開戦時の昭和十六年十二月八日には十九歳だった。それから一ヶ月弱を経た翌昭和十七年一月四日には、二十歳の誕生日を迎えている。

開戦当時の山田は、医学生を目指す若き愛国者にして、医学の勉強そつ

ちのけで古今東西の文学作品を異常な速度で濫読し、懸賞小説に応募して入賞するような文学青年でもあった。そして、その頃の読書遍歴や、自己の内面、周囲との人間関係、世相に対する見解などを、昭和十七年から私的な日記として記録し続けていた。昭和十八年（一九四三）の日記には、太平洋戦争の勝利と、暴動によるルーズベルトの横死を予言する霊能者の記事がある。

突然小針さんが、「そうそうルーズベルトといえは」……と喋って、きのうの朝省線に乗っていると、ふいに近づいて来た奇妙な老人がくれたという一枚の名刺をポケットから取り出した。それは表がふうの名刺になっていて、裏が不可思議な文言の印刷になっているものだった。（中略）靈感による確実なる予言 昭和十九年六月二十五日大東亜聖戦は完全なる大勝利を以て目出度終了なすべし。同五月三日午後三時（日本時間）大統領ルーズベルトは国内暴動のため横死をなす。（中略）自分が面白いと思つたのは、「本年中に街の占師追放、軍需工場へ転職せしむ」という警視庁の意向をのせたけさの新聞を対照して見たときである。きのう一日中、神秘的予言を人々に伝えて廻つた安房庵六々居士は、この朝刊をみていかなる心理を持つたろうか。（昭和十八年一月二十六日）

荷風の日記にも占い師の予言をめぐる噂話が書き留められていた。當時は、庶民の不安を掬い取つて小規模な商売を行う占い師や民間宗教者などもいたし、大本教などの大規模な新宗教もまた、庶民の不安を敏感に活用していたのである。

さて、次に挙げるのは、戦局の好転を伝える、提灯にまつわる流言である。

○夕、勇太郎君の話によれば、この五月ごろ米国を粉砕すべき秘策成り、目下都下の提灯屋は提灯の大量生産に大忙なりと。その噂なら最近他にて聞きしことあり。都下の提灯屋が提灯を作りおること或いは事実ならん。されどこれが戦勝の行列に備うるものなりや否や、頗る眉唾ものなり。もし然るならばこれほど歓天のことなし。しかれどもおそらくその提灯は、現時の管制、闇黒の都下に犯罪防止その他不便のこと多く、懐中電燈の生産見込みなきゆえに提灯の生産を督促しおるものなるべし。多数の提灯を見て、提灯行列を思う。敵艦本土に迫り、敵機国土に乱舞する近時、弱者の描きそうな夢想なり。希望の化物なり。○夜も雪はげし。八時、十時、B 29 一機ずつ来。（昭和二十年二月二十五日）

提灯増産に関する戦勝の噂については「憲兵司令部資料」昭和二十年「四月中ニ於ケル造言飛語」にも、「今年ノ七月頃ニハ日本ハ大勝利ヲ得ルノ捷ヲ祝提灯ヲ東京テ大ニ製造シテ居ルソウタ（全国的ニ蔓延シアリ）」という記録がある。この噂は、ある程度、広範囲にわたつて語られていたようである。

また、「憲兵司令部資料」昭和十九年「九月中ニ於ケル造言飛語」には、「八戸飛行場ニハ最近男装ノ女性ガ飛行士トナツテ来テキル之等ハ大体大尉級デ技術モ男ニ劣ラズ勇敢デアアル」という流言が載る。『平家物語』で活躍する女武者の巴御前や、幸若舞『堀河夜討』における男装の静御

前を想起させる、勇ましくも幻想的な女性パイロットたちが存在するという噂である。憲兵はこうした前向き(?)な流言をも取り締まり、コントロール下に置こうとしていた。

前出『近代庶民生活誌』第四卷(流言)編者の一人で、社会心理学者の南博による流言の分類を借りれば、戦勝行列のための提灯増産や、凄腕の女性パイロットにまつわる噂は、「不安流言」の裏返しとしての「期待流言」あるいは「願望流言」である。山田風太郎は提灯の噂に関して、「弱者の描きそうな夢想なり。希望の化物なり」という批判的な見解を抱いていた。リアルタイムに「希望の化物」という冷静な批評をなしていた事実には着目しておく必要がある。

さて、米軍が飛行機からばらまくビラ、いわゆる「伝单」も、頻繁に人々の噂に上り、そこに書かれた内容は、さらなる噂を醸成していた。なかば自然発生的に湧いてくる噂以外に、外的刺激によつて誘発、生成される噂もあつたのである。また、さきほど荷風の日記にもあつたように、スパイの噂も多かつた。

なお、余は信ぜざるも、現在の流言蜚語の例として次の三種を書き置く。「某月某日、どこそこを爆撃すとB29必ず事前にビラをまく。そのビラに告げしことにほとんど偽りなし」「某省某官吏はスパイなりき。空爆となれば必ずや地下に入りて無電をたたき、その妻はこの音を消さんがためにピアノを打つ。このこと学校に於けるその子の綴り方によつて曝露せり。また某工場監督武官は、空襲の来る前必ず工場より帰宅す。怪しみてこれを調べたるに防空壕中に精巧なる無電機ありたりき」「東条は七十万円の別荘を建てたり。小磯

は南京より支那料理を飛行機にてとりよせて喫すと」ああ、流言の恐るべきかな。ことに最後のごときもの最も悪質にして、信ぜざるといえども心激憤を禁じ得ざるは何ぞや。(昭和二十年四月八日)

スパイには何の価値もあらざるなり。ただし、恐るべきは一人のスパイにあらずして千人の無心なる日本人同士の流言か。どこそこで何を見たりとの悪意なき、為にせざる、しかもセンサーショナルの会話を防止せんがためか。(昭和二十年六月十二日)

スパイに関する噂が多かつたことを示すため、荷風の従兄弟に当たる作家の高見順(一九〇七〜一九六五)の日記からも事例を引いておこう。「小田のおばさん来る。世間話のなかで、スパイが火あぶりの刑に処せられたという。火あぶりなんて刑罰はないでしょうと妻がいうが、いいえ、火あぶりだそうですとおばさんは断固としていう。東京には、そういう噂が流布しているらしい」(昭和二十年四月七日)<sup>27)</sup>

国土の外部から日常を侵食しに飛来する抗いがたい強大な敵「B29」とは異なる、内なる敵としてのスパイを積極的に見出そうとする心性には、いったいどのような作用が働いていたのであろうか。山田は、スパイには何の価値もなく、それよりも怖ろしいのは日本人同士の間で交わされる流言だと喝破している。また、この頃の山田は、新兵器にまつわる次のような噂も耳にしていた。

田熊は殺人光線式の新兵器が完成しているという。自分も以前に、

桜五号とかいうB29撃墜用の新航空機とか、米本土爆撃用の航空隊の話など聞いたことがある。しかし、それは一向に現われない。あやしいものだと自分は思う。

(昭和二十年六月四日)

山田が流言に対して、かなり冷静に、批評的な観点から見つめている事実を読み取ることができる。それは、空襲の噂をめぐる次のような記事からも明らかである。

甲府や清水が爆撃されて、飯田も今日明日やられるという情報が土地の電気会社に入ったとか、市長がいったとか、警察から隣組に通達があったとか、一見流言と明らかかな流言が飯田市の人々を戦々競々とさせて、こうした路の往還にも、百歩も置かず馬車が通る、牛車が通る、リヤカーが通る、荷車が通る。田舎へ、さらに山奥へと、時ならぬ家財の大行列が続いている。

(昭和二十年七月八日)

空襲に関する噂は、あちこちで頻々と生じていた。多くの人々は流言に左右され、あるいは、それが流言である可能性を感じていても、不安を軽減させるための実際的な行動を起こさずにはいられないのであった。内田百閒(一八八九〜一九七二)の日記『東京焼盡』にも、たびたび空襲の噂に関する記述がなされているので、いくつか取りあげてみよう。

この次の空襲は丸ノ内をねらひ精密爆撃を加へると云ふ噂ありて、今迄の鉄兜だけでは心許ないから家内が急いで縫ひ上げたる也。

(昭和二十年二月九日)

今夜から夜明けにかけて敵の空襲ある可しとの噂頻りなり。本當だか取越し苦労だか、その場になつて見なければ解らぬけれど、已に前からみんながその心配をしてゐるのは事実である。

(昭和二十年三月十五日)

昨宵夕食を終つた頃、表に又隣りの岡本の御主人の聲にて、お聞きになりましたか、敵機約百、父島の上空を通過した由にて、こちらへ来るか否かは未だ解らぬが、若し東京を目指してゐるとすれば九時半頃到着する筈ださうです。さう云ふ情報が這入つたからお知らせすると云つて玄開口から歸つた。(中略)今朝又御主人来り、所謂デマであつた様で、さう云ふ事をお傳へしてすまなかつたと云つた。

(昭和二十年四月十八日)

家族を持つ内田百閒は、空襲の噂がある度、半信半疑であつても腰を浮かして右往左往している。一方で、両親を早くに亡くし、孤独に悩んでいた若き日の山田風太郎は、流言に関して冷静すぎるほど冷静な態度をとつていた。このように、作家その他の知識人においても、個々人の性格や環境などによつて、流言に対する態度は異なつていたのである。

## 六 死をめぐる“笑い話”

本稿では、戦後に採集された“戦時下にあつた噂話”について直接的に分析することを避けてきた。“戦時下にあつた噂話”を語る戦後の話

者は、たとえ日記の書き手と同一人物であっても、戦時下という時空間から見て未来の別世界を生きる人なのである。

噂話の内容に、流言、俗信、怪談などというレッテルを貼ることが出来るのは、噂話の内容に信を置いていない、あるいは、それが間違った情報であることを知っているからである。後者には、時代を経て安全圏内にいる我々現代の読者が該当する。

流言が行き交っている最中においては誰しも、真偽が不確かなまま噂の内容を信じるか、信じないか、態度を留保して結論を待つかの、三つの態度をとることになる。そして、空襲に関する噂、食糧不足に由来する噂などに関しては、知識人においてもそれぞれ態度が異なっていた。

戦時下の噂話には、確かに多くの吉兆・凶兆、予言者や予言獣、神仏の霊験、俗信、怪談も記録されていた。しかし不気味な世間話は、必ずしも戦時下において記録されるわけではない。たとえば戦前の荷風の日記には、戦争とは関わりのない怪談もたびたび記録されていた。

また、明治・大正・昭和と、幽霊を含む〈妖怪〉の噂はときおり人々の口の端にのぼっていたし、江戸期の比較的政情その他が安定していた時期にも、予兆や妖怪をめぐる世間話は数多くあった。最近の怪異・妖怪研究では、むしろ江戸時代後期という政情安定の時代にこそ、娯楽の対象としての妖怪文化が爛熟期を迎えたということも分かってきている。<sup>20</sup> こうした不可思議な話群は、平時にも好んで語られていたのである。

あくまでも印象論の域を出ないが、こうした観点を踏まえたくうえで、戦時下の噂話のうち怪異・妖怪文化に関わるものの特徴を挙げるとすれば、——一、ある程度、戦時下の世相を反映している。二、比較的、予言や占いにに関するものが多い。三、怪談めいた怪談よりも残酷な奇談が

多い——といったところに落ち着くであろうか。当たり前といえば、当たり前のことである。

むしろ、戦時下の怪異・妖怪文化を考えるうえで、対照的な場所に位置している資料として着目すべきは笑話である。当時の世間を賑わせていたのは、不安流言や願望流言だけではなかった。ときには、戦時下の世相を反映した笑話が語られることもあった。再び山田風太郎の日記に目を転じてみよう。

○買出し奇談。これは吉田からきいた笑話。○買出しにいつて、警官の眼をくらすのに、軍人の服装をしてゆく者があるそうだ。なるほど軍服を着て、ついでにツケヒゲでもつけて、両手に革鞆でもブラ下げていれば、警官は疑うどころか敬礼でもするかも知れない。いまの世相を最もシンラツに衝くものとして、この犯人は頗る頭脳優秀である。○或る母親が背にカボチャのカゴを背負い、その上に赤ん坊をのせて、あかん坊のきもの裾でカボチャをかくして汽車にのつたところが、汽車がゆれたはずみにあかん坊がおちて死んでしまったそうである。母親はもう一生カボチャを食べる気になれなと泣いているそうである。○これは高須さんから聞いた話。高須さんはいまの世に珍しい立派な本革の靴をはいている。これは新宿あたりの大道靴屋にヤミのうまい奴がいて、どこからか本革を仕入れて、それで作ってくれるのだそうだ。それで先日、下請会社の常盤のオヤジさんが百七十円出して、その本革の靴を作ってもらおうべく高須さんに頼んだ。高須さんが引受けてその大道靴屋に前払いで支払ったところ、翌日から彼は大道に姿を現わさない。持逃げでは

なかった。ヤミがばれてつかまつたのでもなかった。彼は先日から、警官の試験を受けにいったそうであつた！

(昭和十八年十一月十二日)

ここでは、母親がカボチャを隠すために赤ん坊を利用したところ赤ん坊が落下して死んでしまったという話に注目しておく必要がある。仮にもし、この話だけが独立して存在していた場合、現代の読者はこれを、泣くに泣けない悲話として受容してしまうことだろう。実際、戦争によつてもたらされた非業の死(戦地、銃後どちらも)は、遺族などの当事者だけでなく、周囲の人々がその悲しみを共有するための噂話としても語られていた。

しかしながら、である。「これは吉田からきいた笑話」と明記されていること、また、前後を笑話に挟まれているというコンテキスト(文脈)からは、赤ん坊が死んだ話も笑話として語られ、聞かれていたと判断すべきである。

あくまで創作的な「ハナシ」として笑つていたので、と考えることも可能ではある。しかしながら、その解釈にはかなりの無理が伴う。民俗学における学術用語としての、狭義の「世間話」を考えるうえで重要なのは、語り手と聞き手が、一応は「事実であること」を前提に話を共有しているという点である。この点が、完全なるフィクションとして共有される「昔話」(猿蟹合戦を実話と信じる者はいない……)との差異なのである。

赤ん坊が死んだ話には、それをフィクションとして了解するための装飾が、なんら施されていない。その点で、実話として語られる「世間話」

の範疇に属するものであるといえる。

すなわち、この噂話が語られている場では、赤子が死んだという一応の「事実」に基づく情報(ただし遑及不可能な情報)が共有され、なおかつ笑いの対象になっているのである。これは一見、不可思議な現象であるが、実際、戦時下には、見知らぬ人々のむごい死に方が笑いの対象にもなっていたのである。こうした事例は、徳川夢声(一八九四～一九七二)の日記にも見出すことができる。

昨日富士子の工場の少年工が遊びに来ての話、——罹災譚だが、とても可笑しかったという、——赤坂弁慶僑のお堀に飛込んだ者は、泥沼にズブズブと身体がもぐり、頭だけ黒焦げになり、立った姿勢で死んでいたそうだ。或る人(男か女か大人か子供か分らないが)が、そのお婆さんの手を引いて逃げ廻るうち、焼夷弾の直撃が来て、ひょいと見るとお婆さん首無しになっている。そこでその婆さんをうつちやつて逃げたそうだ。赤坂見附のあたりは、町が燃え、三方の宮様邸が燃え、凄まじい竜巻が起り、電信柱に抱きついてやつと飛ばされるのを助かった、——電信柱じゃ燃えるだろう、と言つたら、それがコンクリートの柱なんだ、——という話。斯ういう話が、腹を抱えるほど可笑しいというのは如何なる次第か。話す本人が、元気の好い少年であることも一つの理由だが、それだけではない。

(昭和二十年六月二十七日)<sup>30</sup>

まさに、死と隣り合わせの状態が日常化している。ここでは、肉親や、さつきまで隣にいた人が、一瞬の間に、人間から死体へと変貌する悪夢

のような現象が起こりうる。そして、立つたまま頭だけが黒焦げになって死んでいた人（マッチのイメージか？）や、首無しになっていたお婆さんは、すでに人ではなく、異形の妖怪じみた恐怖の対象としての死体と化している。その、現実に存在しうる一瞬の転換点を、死に対する忌避の感覚が麻痺してしまった人々は、ときに笑話の着火装置としても機能させていたのである。

徳川夢声は、少年の話術以外にも、人々を笑いに導く何かがあると考えている。そうした意味で、夢声の書き残した「それだけではない」の言葉は重い価値をもつ。そこには、死に対する感覚の麻痺と、不安の裏返しとしての空虚な馬鹿笑いに対する自覚があった。

怪談は、怪談として語られている時点で、「ハナシ」としてパツケージングされている、ある意味で安全なものである。ジェットコースターやホラー映画、そして怪談は、不安を愉しむために存在する。たとえば、太平洋戦争以前の日記で、人形にまつわる怪談を記録した後の荷風の言葉を見てみよう。

荷風曰。この事電話にて問合せば信疑は直に知ることを得べし。こゝには唯聞きたるまゝを識すになん。怪談は深く事実を攻究するに及ばず怪談としてこれを聞き味へば可なり

（昭和十五年十一月廿二十六日）

荷風のこの言葉には、怪談を広義の文芸作品として楽しもうとする態度が見られる。怪談は、それをハナシとして共有できる状況にあつては、基本的に安全なものとして認識されているものなのである。しかしなが

ら、戦時下において語られ、聴かれていた「死」にまつわる笑話はどうであつたか。

現在の読者の視点から述べるならば、いわゆる怪談よりも、カボチャの上から落下して死んだ赤ん坊の話や笑話として消費する「態度」の方が怖ろしい。死をめぐる笑話からは、人の死の日常化、刹那主義的な価値観の一般化といった、戦時下が日常であることの異常性を、まざまざと見せつけられるからである。

過去の資料を読むときには、その資料が記録された当時の価値観を踏まえることが不可欠である。不用意なかたちで現在の視点を持ち込んだ資料批判は、アンフェアかつ非生産的な行いに成りうる。逆にいえば、過去のリアルタイムな記録に封印された、当時の人々の「感覚」——たとえばそれは、笑いのツボ——を、資料を読み込んで現在の我々が共有できないとき、両者の間に、どのような断絶があるのかを正しく見極めておくことが肝要である。

戦時下の日記に記録された、悲惨な死を巡る笑話の存在は、こうした問題を我々に突きつけてくる。本来、怖い話や悲しい話として流通するはずの噂を、日常における「笑い話」として消費するのが可能であつた時空間——それこそが、戦時下の世間話という語りの現場が宿していた特異性にほかならないのである。

#### 〈注〉

（一）本稿で「太平洋戦争」と記した場合、それは昭和十六年十二月八日から昭和二十年八月十五日にいたるまでの、連合軍対日本の戦争を指している。戦後になるまで、日本国内では「大東亜戦争」の名称が用いられていた。

(2) 怪異、妖怪、怪談それぞれの語義および使い分けには、未だ明確な定義がなされていない。現代の怪異・妖怪研究の流れに位置する本稿では、おおそ、不可思議な現象として認識されていたコトを〈怪異〉、不可思議な存在として認識されていたモノを〈妖怪〉(フィクションにおける妖怪キャラクターを含む)、「談」(ハナシ)としての機能を特化させて流通していた「怖い話を〈怪談〉としておく。

(3) 本稿のテキストとするのは、『断腸亭日乗』昭和十六年から二十年の内容を含む以下の書籍である。稲垣達郎ほか編『新輯 荷風全集』第二四、二五巻、岩波書店、一九九四年。本全集収録の『断腸亭日乗』には、翻刻の底本にした原本と、先行する公刊本(中央公論社版『荷風全集』および東都書房版『永井荷風日記』)との校異が示されている。引用に際しては読みやすさに配慮して、注を外したり、一部の旧字を新字に改める、影印部分の変体仮名を翻刻する、ルビを付すなどの加工を行った。以下の引用に際しても同じ。

(4) 本稿では、公刊された風太郎の日記のうち、昭和十七年から十九年の記事を収録した『戦中派虫けら日記』(ちくま文庫)、昭和二十年の記事を収録した『戦中派不戦日記』(講談社文庫)をテキストとして用いる。これまでに公刊された『戦中派虫けら日記』および『戦中派不戦日記』は以下の通り。山田風太郎『滅失への青春——戦中派虫けら日記』大和書房、一九七三年。『戦中派虫けら日記——滅失への青春』未知谷、一九九四年。『戦中派虫けら日記——滅失への青春』昭和十七年〜昭和十九年 筑摩書房(ちくま文庫)、一九九八年。山田風太郎『戦中派不戦日記』番町書房、一九七一年。講談社(講談社文庫)、一九七三年(二〇〇二年新装版)。角川書店(山田風太郎ベストコレクション、角川文庫)、二〇一〇年。

(5) 南博・佐藤健二編『近代庶民生活誌』第四巻(流言)、三一書房、一九八五年。

(6) 色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』中央公論社、一九七五年。中央公論社(中公文庫)、一九七八年。(改版、二〇一〇年)。

(7) 現代史の会編『官憲資料にみる民心の動向』『季刊現代史』第三号、現代史の会、一九七三年。

(8) 松谷みよ子『現代民話考』第二巻(軍隊・徴兵検査・新兵のころ・歩哨と幽霊・戦争の残酷)、立風書房、一九八五年。『現代民話考』第二巻(軍隊・徴兵検査・新兵のころ)に改題の上、筑摩書房(ちくま文庫)、二〇〇三年。松谷みよ子『現代民話考』第六巻(銃後・思想弾圧・空襲・原爆・沖縄戦・引揚げ)、立風書房、一九八七年。『現代民話考』第六巻(銃後・思想弾圧・空襲・沖縄戦)に改題の上、筑摩書房(ちくま文庫)、二〇〇三年。

(9) 池内一『太平洋戦争中の戦時流言』『社会学評論』第六号(第二巻第二号)、日本社会学会、一九五一年。伊藤清隆『戦時流言と憲兵』南博・佐藤健二編『近代庶民生活誌』第四巻(流言)、三一書房、一九八五年。重信幸彦『銃後の美談から——総力戦下の「世間」話・序説——』『口承文藝研究』二三号、日本口承文藝学会、二〇〇〇年。根岸英之『市川の伝承民話』における「世間話」「生活譚」再考——市川市国府台周辺の「軍隊にまつわる話」を通して——『口承文藝研究』二八号、日本口承文藝学会、二〇〇五年。

(10) 佐藤健二『流言蜚語——うわさ話を読みとく作法』有信堂高文社、一九九五年。

(11) 川島高峰『銃後——流言・投書の「太平洋戦争」』読売新聞社、一九九七年。『流言・投書の太平洋戦争』講談社(講談社学術文庫)、二〇〇四年。

(12) 橋本章彦『戦時下世間話の神々——昭和の戦争と民衆——』『京都精華大学紀要』三四号、京都精華大学、二〇〇八年。橋本は以下のコラムにおいても、神々の出征やクダンなど、戦時下の世間話を紹介している。橋本章彦『戦時下の噂話 庶民の心の中の神々』堤邦彦・橋本章彦編『異界百夜語り』三弥井書店、二〇一四年。

(13) 岩田重則『天狗と戦争——戦時下の精神誌——』松崎憲三編著『近代庶民生活の展開——くいの政策と民俗——』三一書房、一九九八年。小松和彦責任編集『怪異の民俗学』5 天狗と山姥』河出書房新社、二〇〇〇年にも所収。

- (14) 黒羽清隆「十五年戦争史のフオークロア―日記を読む楽しみ―」『十五年戦争史序説』上、三省堂、一九八四年。野村純一「噂の噂―断腸亭日乗―から」『月刊百科』二二三号、平凡社、一九八二年。同「危険な話群―断腸亭日乗―から」『日本の世間話』東京書籍、一九九五年。同「巷の噂」の行方」『江戸東京の噂話―「こんな晩」から「口裂け女」まで―』大修館書店、二〇〇五年など。
- (15) 『木戸幸一日記』上・下、東京大学出版会、一九六六年。
- (16) 『定本 柳田國男集』別巻第四卷、筑摩書房、一九七一年。
- (17) 佐藤健二「資料の形態を読む」『流言蜚語 うわさ話を読みとく作法』有信堂高文社、一九九五年、八一頁。
- (18) ドナルド・キーン著・角地幸男訳『日本の戦争 作家の日記を読む』文藝春秋、二〇〇九年。文藝春秋（文春文庫）、二〇一一年。
- (19) 久生十蘭作・小林真二翻刻・橋本治解説『久生十蘭「従軍日記」』講談社、二〇〇七年。講談社（講談社文庫）、二〇一二年。
- (20) 狭山市立博物館に寄託された遠藤の日記の内容は、下記の書籍で紹介されている。宮武剛『將軍の遺言―遠藤三郎日記』毎日新聞社、一九八六年。
- (21) 青木正美『戦時下の庶民日記』（シリーズ 昭和とはなんであったのか）、日本図書センター、一九八七年。
- (22) 野村純一「危険な話群―断腸亭日乗―から」『日本の世間話』東京書籍、一九九五年。
- (23) 横井也有については「俳家奇人談」巻之下に記事がある。竹内玄玄一著・雲英末雄校注『俳家奇人談・続俳家奇人談』岩波書店（岩波文庫）、一九八七年。
- (24) 横井也有著、堀切実校注『鶉衣』下巻 岩波書店（岩波文庫）、二〇一一年。
- (25) 江戸期の風刺画に、いかに化物絵が多かったかについては、以下を参照されたい。南和男『江戸の風刺画』、吉川弘文館（歴史文化ライブラリー）、一九九七年。
- (26) 南博「解説」南博・佐藤健二編『近代庶民生活誌』第四卷（流言）、三一書房、

- 一九八五年。
- (27) 高見順「敗戦日記」文藝春秋（文春文庫）、一九九九年（一九九一年新装版）。中央公論新社（中公文庫）、二〇〇五年。
- (28) 「東京焼盡」新輯 内田百閒全集 第二十三卷、福武書店、一九八八年。
- (29) 香川雅信『江戸の妖怪革命』河出書房新社、二〇〇五年。角川書店（角川ソフィア文庫）、二〇一三年。
- (30) 本稿で引用したのは、昭和二十年四月から八月までの日記を収録した『夢声戦争日記 抄』中央公論新社（中公文庫）、二〇〇一年。これ以前には、下記の翻刻がある。『夢声戦争日記』全五巻、中央公論社、一九六〇年。『夢声戦争日記』全七巻、中央公論社（中公文庫）、一九七七年。

#### 著者プロフィール

今井秀和（いまい・ひでかず）昭和五十四年 東京都生まれ  
大東文化大学院文学研究科日本文学専攻 博士後期課程修了。博士（文学）。現在、大東文化大学院文学部非常勤講師、蓮花寺佛教研究所研究員。  
主要業績…「江戸期の妖怪図像に見られる地獄絵・九相図の影響」小松和彦編『怪異・妖怪文化の伝統と創造 ―ウチとソトの視点から―』国際日本文化研究センター、二〇一五年。『構成・文』市川房枝 女性解放運動から社会変革へ』筑摩書房、二〇一五年。『犬神博士』と幻魔術空間（福岡）』『文藝別冊 夢野久作』河出書房新社、二〇一四年。